様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３８８

研究課題名（和文）デュレンマット作品におけるパラテクストの機能とその可能性

研究課題名（英文）The Functions of the Paratext in Duerrenmatt's Works

研究代表者
増本　浩子（Masumoto, Hiroko）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：１０１９９７１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　デュレンマットはドラマトゥルギー上の注釈等、パラテクストと呼ばれる類のテクストを数多く残している。書籍版『加担者』までのパラテクストは、あくまでも読者が文学テクストをよりよく理解するための補助的なテクストとして書かれているが、『加担者』ではむしろ、文学テクスト（戯曲）はパラテクスト（後書き）を書くきっかけを与えるものでしかない。『加担者』ではパラテクストは、質的にも量的にも戯曲を凌ぐほど重要なものとなっている。また、デュレンマットは文学作品と同じモチーフを扱った絵画も多く描いており、文学テクストに絵画を配することによって、演劇や映画といった映像を伴うメディアにより近い表現が可能となっている。

研究成果の概要（英文）：Friedrich Duerrenmatt (1921-1990), one of the most famous Swiss playwrights and novelists, left numerous kinds of texts (such as dramaturgical notes, comments on his own works, counter argument for critics etc.) which accompany his main literary works and can be characterized as paratexts. Usually, his paratexts help readers and audiences to understand his literary works better. In the book edition of the comedy "Der Mitmacher", however, the epilogue is much longer and more important than the drama itself and obviously the literary text (drama) gives the playwright an excuse for writing the paratext (epilogue). In this epilogue Duerrenmatt deals with another topic (the problems of the writing ego) than in the drama (the responsibility of scientists). He also painted many pictures on the various motives he also treated in his plays. By arranging paintings in literary texts, it is possible for him to express his visual images like on the stage or in movies.

研究分野：独文学・独語圏文学

キーワード：現代スイス文学　デュレンマット　パラテクスト　文学と絵画

１．研究開始当初の背景

文学テクストとは何かということは一見自明なように思われるが、実際にはこの概念を規定することは非常に難しく、どのような基準に照らし合わせるかによって何が文学テクストなのかは常に変わり続ける。常識的に文学テクストとみなされるテクストの核にあたる部分の周辺に、文学テクストと呼べるかどうかがあいまいなテクストが存在する。たとえば日記、書簡、注、作者本人による注釈などがそれにあたるが、これらの多種多様なテクストは「パラテクスト」と呼ばれている (cf. Gérard Genette, 1987)。「パラ」はギリシア語で「隣」という意味をもつが、それは核の部分を取り巻く周縁的なテクストが、文学テクストと非文学テクストの境界線上に位置しているからである。

多くの場合、境界線上に位置するテクストが文学テクストとみなされるかどうかは、時間的な隔たりと密接に関係している。つまり一般的に、書かれた時と受容される時との間にある時間的な隔たりが大きければ大きいほど、もともとは文学テクストのつもりで書かれたのではないテクストが文学テクストとみなされる傾向にあるのである。そのような傾向は、たとえば古典作家の全集によく見られ、そのような全集には通常、本来の文作品と並んで、日記や書簡などが収められている。

20 世紀のドイツ語圏スイス文学を代表する作家フリードリヒ・デュレンマット (1921-1990) も、戯曲や小説と並んで「パラテクスト」と呼ばれる類のテクストを数多く書き残している。1950 年代から 60 年代にかけて劇作家として活躍したデュレンマットの創作活動の特徴のひとつは、観客や読者、文芸評論家、さらには文学研究者の反応にまでも注目したことである。そのため彼は、いったん発表した戯曲に解説を加えて出版し直し、その後さらにその解説に注をつけた版を出す等々、「受容者とのインタラクション」とでも呼ぶべき手順をとることが頻繁にあった。つまり、デュレンマットの場合は本来の文学テクストに、文学テクストかどうかの判断が難しい、いわゆる「パラテクスト」が次々と付け加わることによって、ひとつの作品が膨張していったのである。デュレンマットの死後、1998 年に出版された決定版全集にはそのような「膨張したテクスト」が収録されているが、この全集の前身にあたる 1980 年版全集の編集作業にはデュレンマット自身も参加しており、戯曲や小説が注釈等の「パラテクスト」と共に読まれることを作者自身が望んでいたことがわかる。

デュレンマットにおいては「パラテクスト」が独特の文体と美的価値をもった特殊なテクストであり、これらを考慮に入れない限り、本来の文学作品の部分の理解が不十分になってしまう。ところが、従来のデュレンマット研究では、研究対象が本来の（狭い意味での）文学テクスト部分に限られる場合がほとんどであり、注や解説などには付属的な意味しか見出してこなかった。

「膨張したテクスト」の最も典型的な例は喜劇『加担者』(1972/73) だろう。これは初演がスキャンダラスなほどの大失敗に終わり、その後デュレンマットが演劇と決別するきっかけとなった重要な作品である。それまでデュレンマットは戯曲の上演直後にその作品を本として出版するという販売戦略をとっていたが、『加担者』の場合は初演の失敗について考察した後書きをつけて出版することになり、その後書きがなかなか完成しなかったために、本の出版は初演から 3 年後の 1976 年になってしまった。戯曲そのものが 90 頁ほどであるのに対して、後書きは実に 200 頁以上にもおよぶ長大なもので、そのため、本として出版された『加担者』には他の戯曲とは違って「複合体」というサブタイトルが付けられている。

このような特異な構造をもつ作品であるにもかかわらず、従来のデュレンマット研究では『加担者』には失敗作のレッテルが貼られ、そもそも分析の対象として取り上げられることがほとんどなかった。唯一と言ってよい本格的な研究書は、デュレンマットの全遺稿を所有するスイス国立図書館の研究員 Ulrich Weber (2007) によるもので、『加担者』に関連する膨大な量の遺稿を詳細に検討し、後書きを書く作業そのものが最晩年の 2 巻からなる自叙伝風散文『素材』(1981/1990)を誕生させたことを裏付けた画期的な研究である。しかし、重点はあくまでもテクストの成立過程に置かれており、「パラテクスト」としての後書きと戯曲本体との関係という問題には触れられていない。

２．研究の目的

本研究の目的は、デュレンマットの作品をパラテクストをも含み込んだ「複合体」としてとらえ直し、デュレンマット作品におけるテクストとパラテクストとの関係、パラテクストのもつ機能、パラテクストによって広がる表現の可能性について明らかにすることだった。その際、装丁や挿画として用いられているデュレンマット自身の描いた絵画もパラテクストとみなした。（デュレンマットは作家になる前は画家になることを志しており、絵画作品も多数残している。それらの絵は 1980 年版全集、1998 年版全集のいずれにおいても装丁に使われている。）分析の対象としては主に、戯曲の 2 倍以上の長大な後書きをもつ「複合体」としての『加担者』と、デュレンマット本人の描いた挿画付きで発表された短編小説『ミノタウロス』(1984/85) を取り上げた。

３．研究の方法

デュレンマットの作品をパラテクストという観点から概観しつつ、パラテクストが特

に重要な役割を果たしている上記の 2 作品を具体的に分析するという方法をとった。その際、出版されたものだけでなく、ベルンの国立図書館に所蔵されている遺稿（＝発表されなかったパラテクスト）も適宜参照した。研究は以下のような手順で行われた。

（1）デュレンマット作品におけるパラテクストの発展の検証：　デュレンマット作品において、戯曲や小説と共に発表されたパラテクストの在り方がどのように発展しているかを時系列に沿って検証する。典型的なパラテクストとしては、演出家や俳優に与えたドラマトゥルギー上の注釈、上演に際して観客に宛てて書いたメッセージ、ある上演が不評だったときに批評家向けに書いた言い訳、戯曲を本として出版するにあたって書き加えたコメントなどがある。このような多種多様なパラテクストを分類し、それらの機能について概観する。

（2）『加担者』と『ミノタウロス』の分析：狭義での文学テクストのみならず、パラテクストをも含み込む「複合体」としてのデュレンマット作品の在り方を最も典型的に示している『加担者』と、絵画が重要な役割を果たしている『ミノタウロス』を詳しく分析する。

（3）パラテクストが広げる表現可能性の考察：　テクストに加えてパラテクストを配することによって、どのような相互作用が生じ、何が変わるのか、また、パラテクストの存在が作家にどのような表現の可能性を提供するかについて、メタレベルで考察する。

４．研究成果

本研究によって、以下の点が明らかになった。

（1）初期の短編小説には解説や注などはほとんどついていないが、戯曲には演出家や俳優に与えたドラマトゥルギー上の注釈、上演に際して観客に宛てて書いたメッセージなどが付属することが多く、その分量はデュレンマットが劇作家の地位を確立するにつれて多くなり、それと同時に小説にも後書きや解説が付き始めて、最終的にはパラテクストの分量が戯曲部分の分量を凌ぐ喜劇『加担者』に至る。

（2）『加担者』までのパラテクストは、あくまでも読者や観客が文学テクストをよりよく理解するための補助的なテクストとして書かれているが、『加担者』ではむしろ逆に、文学テクスト（戯曲）はパラテクスト（後書き）を書くきっかけを与えるものでしかない。『加担者』ではパラテクストは、質的にも量的にも戯曲を凌ぐほど重要なものとなっており、そこでは「科学者の責任」という戯曲のテーマを離れて、最終的には書くという行為そのもの、あるいは書いている自分とは何か、という問題について考察されている。

（3）『加担者』の後書きは 200 頁という破格の分量をもち、見かけ上は「後書きのための前書き」に始まって「後書きのための後書き」に終わる、ひとつの独立した作品の形をとっている。さらにこの後書きは 2 つの短編小説をも含み込んでおり、それまでのデュレンマット作品の（発表された）パラテクストとは明らかに異なる構造をもっている。この構造は、最晩年の自伝風散文『素材』にそのまま採用されており、『素材』は（それ以前のデュレンマット作品における文学テクストとパラテクストの分類から言えば）パラテクストからのみ成り立っている作品とみなすことも可能である。

（4）もともと画家志望だったデュレンマットにとって、絵画は言語と同じくらい重要な表現手段だった。絵画を描くことの意味については、デュレンマット自身が『自分の描いた絵とデッサンについての個人的な注釈』(1978)というエッセイを書き残している。このエッセイの中でデュレンマットは、絵画は文学作品を補完するものではあるが、単なる挿絵ではないことを強調し、「我々の世界は言語だけではとらえられない」と主張している。つまり、たとえば『ミノタウロス』の場合、絵画が文学テクストに添えられているのではなく、絵画の部分と言語で表現された部分の両方があって初めてひとつの作品として成り立っていると理解されるべきであり、文学テクストの部分のみを独立させて読むべきではない。

（5）デュレンマットにとって世界は「顔のない」抽象的なものであり、その抽象的な世界に具体的なイメージを与えるものが絵画（すなわち Bild＝イメージ）である。「顔のない世界」の具体的なイメージは、ギリシア神話に登場する「迷宮」である。「迷宮」はミノタウロスから見た世界に他ならない。短編小説『ミノタウロス』では、ミノタウロスは自分が「迷宮」に閉じ込められていることも、自己と他者の区別も知らず、突然目の前に現れた他者を自覚のないまま殺してしまう。絵画ではミノタウロスはしばしば「世界史」という名の、大量殺人を犯す怪物として描かれている。

（6）「複合体」としての『加担者』が決定的な影響を与えた晩年の自叙伝風散文『素材』で語られているように、「迷宮」と「塔の建設」はデュレンマットの作家人生を貫く最も重要な文学的素材である。ギリシア神話に登場する「迷宮」からデュレンマットが連想し、考え、表現したことは実に多岐にわたっており、これらを素材として文学作品のみ

ならず絵画も多数創作されている。

（７）デュレンマットにおいて「迷宮」は、人間に世界を正しく認識することは可能かという認識論的な問いと深く結びついている。この問いはさらに、人間は自分自身を正しく認識することが可能かという問題につながっている。

（８）「迷宮」という素材を扱ったものとして、『ミノタウロス』は映画台本『ミダス』(1970/1980-84/1990) および中編小説『依頼』(1984-1986) と関連づけて考えることができる。ミノタウロスと同じくギリシア神話に登場する人物ミダスは、デュレンマットが世界や現実を言語や映像その他のメディアを使って描くことが可能かどうかという問題を扱うために導入したモチーフである。『依頼』においてもビデオというメディアの客観性が問題になっている。

（９）文学テクストに絵画等のビジュアルな（言語で表現されたのではない）パラテクストを配することにより、作家にとっては演劇や映画といった、映像を伴うメディアにより近い表現が可能となる。

（10）上演を繰り返しながら書き直されていった戯曲の場合、最終的に文学テクストのみならず、上演記録、作者による注釈や解説等のパラテクストが含み込まれた「複合体」として出版されることによって、テクストの生成過程が読者にも理解できるものとなる。特にデュレンマットの場合は、パラテクストの存在が初期の作品と晩年の作品との関連を明らかにしている。

本研究はデュレンマット研究に「パラテクスト」という概念を持ち込んだ最初の本格的な研究である。その結果、従来ほとんど重要視されてこなかった『ミダス』と『依頼』との関連が明確になり、両作品ともに「迷宮」のモチーフを扱った一連の作品の中に位置づけるられることがわかった。また、デュレンマットの文学テクストと絵画との関係に関する研究は本国スイスでもまだ端緒についたばかりであるが、本研究はそのテーマにも貢献するものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）
①増本浩子「文学的素材としての「迷宮」―デュレンマットの作品を貫くアリアドネーの糸」、『DA』（神戸大学ドイツ文学会編）第12号、2018年、19－35頁（査読有）

〔学会発表〕（計　３　件）
① Hiroko Masumoto: Das Bild des Wissenschaftlers in den Werken von Brecht, Frisch und Duerrenmatt. クザーヌス大学・神戸大学共催国際シンポジウム “Natur, Geist, Schicksal” 2017年7月5日、クザーヌス大学（ドイツ）

②Hiroko Masumoto: Literature after Fukushima: Reinterpretation of German Classics. 国立台湾大学主催 5th International Symposium on European Languages in East Asia、2014年10月24日、国立台湾大学（台湾）、（招待講演）

③増本浩子「フィクションとしての自伝―フリッシュ、デュレンマットと私小説」日本・スイス国交樹立150周年記念学術ワークショップ、2014年9月11日、チューリヒ大学（スイス）（招待講演）

〔図書〕（計　２　件）
①フリードリヒ・デュレンマット『ギリシア人男性、ギリシア人女性を求む』増本浩子訳、白水社、2017年、228頁

②フリードリヒ・デュレンマット『デュレンマット戯曲集 第３巻』、葉柳和則、増本浩子、香月恵里、市川明（共訳）、鳥影社、2015年、663頁（『加担者』の翻訳135－240頁、訳注553頁、解題563－567頁、論考「デュレンマットの喜劇論」580－587頁を担当）

〔その他〕
ホームページ等
（演劇祭プログラムへの寄稿）
増本浩子「さまざまなテクストが織りなすタペストリー―『天使バビロンに来たる』の間テクスト性」、『ふじのくに・せかい演劇祭2015公式ガイドブック』(SPAC静岡県舞台芸術センター編）2015年、30－40頁

６．研究組織

(1)研究代表者
増本浩子（MASUMOTO, Hiroko）
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：10199713

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）